

## ロシア人植物学者 Maximowicz が函館で採集した イヌノヒゲの産地の解明

雨竜町 佐々木 純一  
福岡市 佐藤 広行

C. J. Maximowicz (1827-1891) (以下マキシモヴィッチ) は日本の多くの植物に学名をつけた最も重要な科学者の一人である。彼は 1860 年 9 月 18 日に北海道・函館に上陸し多くの維管束植物を収集している (Grabovskaya-Borodina 2016)。日本のホシクサ科ホシクサ属植物の研究の先鞭をつけたのはマキシモヴィッチで、ホシクサ属植物のイヌノヒゲ *Eriocaulon miquelianum* Körn. を 2 点の標本を引用して報告した (Maximowicz 1893)。この報告によると、マキシモヴィッチは 1861 年にイヌノヒゲを採集しており、「カヤツリグサ科が生育する有川の沼地、9 月 3 日、開花過ぎ個体、(著者自身採集)」と「蝦夷、箱館近くのカヤツリグサ科とモウセンゴケが生育する沼地、9 月 15 日、61 (注：標本番号?) 開花個体 (著者自身採集、アルブレヒト同行)」と記述している。しかし、現在の函館市では有川という地名は失われ、今日では有川埠頭・有川大神宮に名を遺すだけである。また、函館周辺では湿地を地図上で見つけることは出来ない。さらに、マキシモヴィッチが発見し、日本にイヌノヒゲが分布するという記録が残ったものの、佐竹 (1940) はイヌノヒゲの項で、「これはニッポンイヌノヒゲ *E. hondoense* Satake である」と訂正している。

そこで、マキシモヴィッチが函館で採集したというイヌノヒゲの変遷を調べ、北海道にイヌノヒゲが分布すると言えるのか、

また、産地の「有川の沼地」と「箱館近くの沼地」はどこだったのかを、古地図等を元に調査した。

### マキシモヴィッチの「箱館」滞在について

マキシモヴィッチは極東アジア地域の植物調査で、開港された箱館に 1860 年 9 月に入港、須川長之助を使用人として雇い、植物好きの長之助に植物採集と標本作成を手ほどきして、長之助は指示どおりに採集できるまでに熟練した (山田 1906)。マキシモヴィッチの箱館滞在時は箱館外国人遊歩程度の規制があり、日本が許可した行動圏は 10 里 (約 40km) の範囲であったため、より遠方は須川長之助が単独で採集を実施、また領事館の医師でドルパット大学の同級生であるミハイル・アルブレヒト (M. Albrecht) もマキシモヴィッチに同行して採集を手伝った。箱館滞在時の採集旅程は、マキシモヴィッチ自身が記述した行動記録ともいべき「ライゼ・ターゲブッフ」が唯一の記録で、本格的な植物採集は 1861 年 5 月 19 日から 10 月 11 日までである。マキシモヴィッチは 7 月末から 8 月中は持病のすねのリューマチ痛のため箱館周辺だけで採集した (井上 1996)。標本の日付では 4 月 2 日から 10 月 14 日の「野田部」が最後である。採集地の多くが「箱館」「茂辺地」「市渡」で、採集者名は全てマキシモヴィッチで長之助の名前が無い (高橋